少子社会における子育ての考察（第一報）

A Study on Child Raising in A Society with A Low Birth Rate (1)

――母性と子どもの遊び――

河　野　光　子

1．緒言

子育ては，環境による教育と言われている．急速な少子社会への移行は，その環境の激変をもたらした．周知の通り，この子育て環境の激変は，子どもの成長発達から人間形成にいたるさまざまな面で，深刻な問題や新たな課題を生じさせている．

本稿は，今後さらに進行すると予想される少子化を控え，次代を担う子どもの健やかな成長と望ましい人間形成のための，少子社会における子育ての課題とその対応について考察する．

第一報では，少子化の現状と少子現象の子育て上の意味，および当面する子育てにとって大切なものは何かについて，そのユニークな保育と教育で注目されている保育園（千葉県）[1] と幼稚園（福岡県）[2] の事例から概観していく．

2．少子社会の現状

年齢別人口構造は，通常，安定したピラミッド型をなすものである．わが国は，戦後の急速な出生率の低下と長寿化で，急激なトックリ型の少子高齢社会へと変貌した．

はじめに，そのおおまかな推移と現状とを見てみよう．1950（昭和25）年，子ども（15歳未満）の数が総人口に占める割合は，約3000万人の35.4％であった．この年から出生率が低下し，少子化が始まるのであるが，20年後の1970（昭和45）年，早くも2515万人で24.0％となり，1997（平成７）年には，1950年当時、老年（65歳以上）人口の７倍以上いた子どもの数は，老年人口より少なくなった[3]．そして，2005（平成17）年現在では，子どもの数1765万人，総人口に占める割合は，老年の19.72％に対し，わずか13.91％という過去最低になっている[4]．

子どもの数が老年人口よりも少なくなるというのは，我が国の人口の歴史の中で初めてであり，そのスピードは世界でも異例と言われ，子どもの数の割合も諸外国に比較して，最も低い水準となっている[5]．

次に少子化の主要因である合計特殊出生率（以下，出生率と略す）の推移も参考までに見てみる．出生率の統計数値は，明治期にはなく，1925（大正14）年の5.11[6] が最初となる．以

後，敗戦翌年までの21年間には，戦争ということもあって，５年次分の数字がバラバラにあるだけで，毎年次の数字が揃うのは，1947（昭和22）年以降である．それによれば，第一次ベビーブーム期（1947〜49）3年間の平均は，4.42である．急速に低下し始めたのは，前述のようにその直後の1950（昭和25）年からで、3.65という大幅なダウンであった．早くも1950年代後半には，人口置き換え水準（2.08前後）まで低下し，1975（昭和50）年ついに2.0を割り，1990（平成２）年の1.57ショック後も，1994（平成6）年の前年比プラス0.04の例外を除き，一貫して低下の道を辿り，2003（平成15）年・2004（平成16）年では，1.29という危機的状況に至っている．

このような，あまりにも急速且つ異常とも言える出生率の低下と，それに伴う人口構造の歪みは，近年のこれまでにない政治面・経済面における国際社会の動向と相俟って，さまざまな激動と激変を起こし，深刻且つ困難な問題を生じさせている．子育てもまた例外ではないのである．

３．少子化と子育て問題

少子化現象は，子育て環境を大きく変化させ，子育てに関わるさまざまな問題や新たな課題を生み出した．「３歳児神話」の否定も，その重要問題の一つである．

ちなみに「３歳児神話」の３要素とは，（１）小さい時は大切，（２）小さい時は母親の愛情がベストで，母親が育児に専念すべきだ，（３）もし母親が子どもの幼少期に働くと，子どもの発達が歪むというものである（３要素の抽出は大日向雅美氏)[7]．

例えば，柏木恵子氏は，人口心理学の見地から，少子化と「母子関係」について，大要を次のように述べる．

少子化は，国の将来のため憂慮すべきとして，さまざまな施策や対策がとられているが，実効があまりあがっていないのは何故か．それは，これまでの施策や対策（育児休業の奨励・保育所増・児童手当増額・育児不安の相談等々）は，女性が子どもを産まないことへの懸念や，なぜ産まないかという暗黙の非難の中，どうしたら子どもを産んでくれるかと言わんばかりの育児支援策であり，子どもを産むか否かは，女性がどう生きるかとの問いそのもの，少子化という人口上の現象は，とりもなおさず女性の心の問題であるという認識の欠如にある．子どもを産むことを日常「つくる」というように，子どもの誕生は今や自然現象ではなくなり，子どもを持つことは女性の選択の一つとなった．少子化・少産という人口上の現象は，女性が子どもを産むことをめぐる心の問題，子どもの価値の変化の問題，さらに現今の結婚や家族の中での女性の心の問題である．女性にとって子どもは，絶対不問の価値を持つものではなく，相対的なものとなっており，従来，普遍性を持つとされてきた母子関係の“一心同体”という暗黙の了解も決して自明ではなく，現実的にも一心同体というような調和的関係では必ずしもな

い．したがって少子化問題には，「子どもにとっての親」から「親にとっての子ども」へという180度の視点の転換が必要である[8]．

少子化問題における女性の心理考慮の不可欠性を言う柏木氏の指摘は，重要且つ妥当なものであると思われる．ただし「子どもを産むか否かは，女性がどう生きるかとの問いそのもの．少子化と人口上の現象は，すなわち女性の心の問題」と言うとき，それが少子化施策上の“女性の心”の認識欠如の指摘とその重要性の強調という限りにおいて異義はないが，あくまで“女性の心”の問題は，少子化現象の主要矛盾であり，余り強調しすぎると，それがあたかも根本矛盾であるかのような誤解を生じさせる危険性をも孕んでいることは，注意しなければならないだろう．それは戦争という事象にとって，“人の心”の問題はきわめて大切なものではあるが，根本矛盾ではないのと同じである．

次に母子の絆の“一心同体”という，いわゆる“母性神話”の疑問ないし否定の問題であるが，これは子育ての問題にとってきわめて重大な問題であるとともに難しい問題である．

確かに，それが本能であるか否かは別にして，さまざまな理由，例えば女性のライフサイクルの変化，高学歴化，社会進出，性の解放とりわけ医学の発達による性と生殖の分離等々で，女性の意識や母性の現れ方に大きい変化が現れてきたことは事実であり，また，それが〈結婚―性―生殖〉の三位一体の女性にとっての宿命的桎梏や，子育てはいわば摂理としての母親の任務や責任とする，これまでの長い固定観念の打破に果たした意義と役割は認められなければならないし，高く評価されるべきものである．だが，「母性神話」否定には，以下のようないくつかの留保を忘れてはならないと思う．

ちなみに「母性とは，子どもを産み育てる過程で働く，受容的な優しい心の働き」を言い，

> この心の働きは，子どもを「養い，育て，世話し，保護する」という保育行動として現われ，「子どもを可愛いと感ずる」「慈しむ感情」を伴う[9]．

とされるものである．

さて，この母性について林道義氏は次のように言っている．

> もともと母性とは脆弱なものであり，壊れやすいものだという認識が必要である．そもそも生命を再生産するという営みそのものが，綱渡りのような危ない橋を渡っているとも言える．（中略）ましてや人間の本能行動はますます複雑になっており，微妙に学習と連動しているので，本能行動とは単に無意識に自律的に進行していく過程ではなく，意識的な思想やイデオロギーなどとも密接に関係してくる．つまり意識の側からの作用をも強く受けるようになっている．したがって，意識が母性本能に対して敵対的になると，母性本能は歪んだり，解体してしまう[10]．

子育ての重要な環境である家族についても，林氏は，性別役割分担は生得的な男女区別に基づいているとして次のように述べている．

近代家族の男女の分業体制は，じつは男女の自然な区別に沿い，大部分の人々の性質に即したものであった．もちろんそれを可能にしたのは，家族の一人が働けば家族全員が食べていかれるほどに社会が豊かになったということ，また産業革命以降に職場と住居が分離したということがあったからである．しかしそうした物質的な条件だけで，生活の一定の形態がこれほどまでに社会的に広がるとは考えにくい．そこには人間の自然な傾向に合致した何かがあったと考えるほうが自然である．その何かとは，自然な男女の区別と，それに合った分業であった[11]．

この問題に関する上記「自然」についての私見は次の通りである．

「個体発生は系統発生を繰り返す」と言われている．地球上に生命誕生以来35億年，ヒトの胎児は280日前後の妊娠期間でその進化の跡を辿る．500万年かかった直立二足歩行を生後1年で始める．乳幼児期の神秘さと重要性は，それだけを考えてみても想像以上である．

ところで直立二足歩行開始から500万年と言われるが，ヒトはまだ，ウマが四足歩行に適応したと同じ程度の直立二足歩行への適応を完成していないと言う．貧血や胃下垂・腰痛・ヘルニア・脊椎彎曲・難産といったヒト特有の数多くの病気や障害は，そのためだと言われている．中でも難産は，直立二足歩行の開始によって対峙することとなったヒトが，その「種」存続のためには，どうしても超えねばならない最大の障害であった．すなわち，それは直立二足歩行によって分娩に不都合となった産道の彎曲に加えて，脳の発達でますます大きくなった頭がもたらした分娩の困難と危険性である．やむを得ない生物としての対応は，胎児が大きくなり過ぎないうちの出産である．ヒトが月満ちての正常出産でも，生物学的には生理的早産と言われ，生後1年が俗に体外妊娠期と言われる所以である．乳幼児期の母子関係の中には，まだ知られていない多くの「自然」があり，その重要性は考えられている以上のものと言うべきではなかろうか．

上述のように“母性神話”の否定の問題は，子育てにとっての重要問題であるばかりでなく，その問題の本質は，人類の文明論に通底する“自然破壊”[12]の問題を含むものと言ってよい．重要な問題なので，いささか長い引用となるが，義江彰夫氏の〈自然破壊を視点に新しい歴史観を〉と題する一文を借りて問題の所在を示しておきたい．

私達はまずすべての民族の文明と進歩の歴史が，同時に自然征服と破壊の歴史でもあったことを認めねばならない（中略）．人間支配は，自然支配と表裏一体で生じたのである．人間支配の揚棄を目指して生まれたはずの社会主義社会で，管理主義が再生してくるのは，人類の発展をめざしての自然破壊が，実は人間支配の根源に関わるという自覚が，ここでも確立していないからではないかと私は思う．未開社会の祭りは，荒ぶる神々を鎮める祭儀を見るだけでも，自然を体現・統御する神に自然乱費の許しを請う営みでもあったことがわかる．古代文明形成の中で，政治の対極に出現する思想や宗教は，ストア派哲学

の禁欲主義，原始仏教の愛欲物欲からの解放，老荘思想の自然との調和など，どれをとっても自然支配に対する深い反省で貫かれていた．（中略）近現代においても，人間はこの課題を全面放棄してしまったわけではない．ルソーは社会契約の背後に自然状態を意識しつづけたし，マルクスは労働と使用価値を分析する中で，人間と自然の本来的な質量交換を予感していた．日本においても自然の理に即した農耕生活を説き，儒仏の文明をその破壊者と批判した安藤昌益の思想は，この視点から見直すと無限の輝きを放ってくる．（中略）ただ全体的に見ると，以上のような模索は近現代に至るまで局部的批判に止まり，現代の危機を乗り越える総合的な理論と営みに昇華・体系化していない（以下略）[13]．

女性の真の解放・母子の真の幸福は，母子関係の「自然」の否定や性差の無視ではなく，その正しい評価と尊重にこそあるのではないだろうか．なぜならば，子育て問題を含め，あらゆる人間の営みは，究極は“人間とは何か”“人間の幸福とは何か”という極めてファジーな問題と通底しているからである．

4．子どもと遊び

子どもにとって遊びは，生活であり学習であると言われている．曾て子どもは嬉々として戸外で時間を忘れて群れ遊んでいた．『梁塵秘抄』に〈遊びやせんと生れけむ，戯れせんとや生まれけん，遊ぶ子供の声きけば，我が身さへこそ動がるれ〉と言う子どもの遊びを詠んだ有名な神歌があるが，群れ遊ぶ子どもの姿は，曾ては町でも田舎でも日常的な風景であった．嬉々として群れ遊ぶ子どもの声は楽しい．聞く者の心ゆるがすこの楽しさは，げに命の共鳴．子どもにとっての遊びは，“いのち”まさに“生きること”と同義故の“いのち”の共鳴なのだろう．

だが，群れ遊ぶ子どもの声も姿もいつしか消えた．それどころか，子どもの声を嫌う大人さえ，現れてきている．異常と言う他はない．

ところで子どもにとっての遊びの重要性に関しては，ハローの子ザルについての有名な実験がある．その実験の内容と結果の要点は，次の通りである．

ⅰ）一匹ずつ完全に隔離して育てた子ザル⇒強度のノイローゼもしくは精神病状態に陥る．

ⅱ）他のサルを檻越しに見せるが，まったく接触ができないように隔離して育てた子ザル⇒ⅰ）と同様の状態となる．

ⅲ）ⅰ）の子ザルをいろいろ時間を変えて他のサルと接触させる⇒いかなる種類の社会的接触もできない．

ⅳ）ⅲ）と同じ方法のⅱ）の子ザル⇒他の子ザルとの接触では，ある種の社会的関係はもつようになるが，極めて不十分．

ⅴ）ⅰ），ⅱ）両グループのサル達は，お互いに友情のかけらも示さず，成長しても種の保

存に不可欠な一般に本能と考えられている交尾すらできない．

vi）母親とだけ一緒にして隔離して育てられた子ザル同士⇒効果的な社会的接触を行う気配さえ見えない．

vii）vi）の母親のかわりに布製の母親を置いて隔離し，1日に20分の子ザル同士のグループ遊びをさせて育てた子ザル⇒正常に育つ．大人の交尾を見る機会を与えられなかったにもかかわらず，その本能の発現も正常[14]．

この実験から言えることは，子ザルの社会性はもちろん，その正常な成長発達に，同年輩の仲間との遊びがいかに重要であるかと言うことであろう．同時にこの実験は，少子社会の子育てについての母子癒着や子離れ，親離れに関しても重要なヒントを与えてくれると言ってよいであろう．もちろん，この実験の結果をそのまま人間に当てはめるには，一定の留保を必要とするであろう．しかし，この実験の結果は，人間がサルとは比較にならぬ高度で複雑な社会生活を営むことを考える時，子どもにとってのアソビの意義はもちろん，いわゆる巣籠もり現象と言われる最近の子ども達の生活の見直しの必要を促すには充分であろう．

但し，ここで注意すべきことは，サルの子ども達は，学習や社会性の発達やましてや将来の「種」存続と言う本能発現の準備のために遊ぶのではなく，遊びたいから遊び，遊びが“快”だから遊ぶのであって，それが結果としてさまざまな学習となり，社会性の発達を促し，交尾のスムーズな発現をもたらすということである[15]．換言すれば，正常に育つと言うことである．

乳幼児期は，人間が人間として生きていく上で，不可欠な最も重要と思われる能力の基礎形成期であり，「三つ子の魂百まで」と言われるように，広い意味での社会性の開発を中核とするものであるとするならば，子育てにとっての遊びの意義はもはや明らかであろう．

ところで，自然で望ましい子どもの遊びが成立するためには，その育ちの環境としての時間・空間・仲間の三つが主要な条件となる．曾てこの三条件は十分に充たされていた．子ども達は嬉々として，毎日，日暮れまで戸外で思い切り群れ遊んでいた．しかし，その条件のいずれもが，今やほとんど失われてしまったことは，周知の通りである．それだけではない．子どもの遊びは，育児がそうである如く，地域社会の自然や生活や歴史などと深く結びついた「文化」であるということである．文化は継承されなければ失われる．子ども達の群れ遊ぶ声が消えたと言うことは，そのままこの子どもの大切な文化が失われたと言うことである．子どもの健やかで望ましい成長発達のために，子どもの遊びの復活が急務である．

但し，それを家庭や地域社会に期待するのは，現実問題として困難であり，またその情況でもない．したがって，ここでも保育園や幼稚園の日々の保育のあり方や保護者との連携，地域社会の支援と協力が重要な課題となる．そういう意味で，その保育と指導に高い評価を受け注目されている二つの園を取り上げ，上述の課題にどのような取り組みがなされたかの原点を見

ることとする．なお，紙数の都合上，その詳細と保育内容の分析等は，第二報に載せることにする．

5．二つの園の事例

（1）和光保育園（千葉県富津市，園児数約100名）

「この保育園に入れてから子育てが楽しくなりました」，「親同士の関わりが楽しくて，もっと長く付き合いたいから母ちゃんに頼んでもうひとり産んでもらったというお父さんもいますよ」と評価の高い保育園．しかし，この保育園も以前は，「しつけ」重視・設定保育中心・行事の多い普通の保育園であった．何が普通の保育園を保護者までが楽しくなるような保育園に変化させたのか．

「しつけの保育から，遊びを大切にする保育への転換」だという．転換の理由は，今の子どもは家庭にいると，早く早くとせかされる．あれしちゃいけない，これしてはだめと止められる．自分でできることもやらせてもらえず，失敗する前に止められ，やってもらう．行事や設定保育を減らしたのは，保育園にいる時間くらい，その子のテンポに合った時間の流れを大事にするため．子ども達は，ケーキもしょっちゅう食べ，家ではテレビ漬けで，ビデオもパソコンも本も図鑑も家庭にはある．保育園児でも通信教材をとり，計算塾や英語塾に通っている．こういう時代に保育では何を大切にしたらいいのか．それは家庭ではできなくなっているもの，群れて遊ぶこと．

卓見である．しかも，それを実行に移したところがすばらしい．それにもう一つ，この園のすばらしいところは，子ども達に望ましい保育を，園長の「子どもが生まれたとき，子どもと一緒にもうひとつ生まれるのが，お父さんとお母さん．そのお父さんとお母さんを育てるのが子ども」と言う発想の転換で，保護者と園との二人三脚での，地味ではあるが，アイデアを出し合っての手作り保育の日々の実践であろう[16]．

（2）筑紫女学園短期大学附属幼稚園（福岡市，園児数約260名）

次は，保育内容のユニークさとのびのび保育で評価の高い福岡市の幼稚園の改革の事例である（元園長からの少子化時代の幼稚園の役割についての聞き取りによる）．

> この幼稚園も福岡市の都心ということもあって，少子化とドーナツ化現象で長い定員割れが続いていました．私が園長になって，その立て直しのため最初に取り組んだ事は，保育内容の見直しとその改革でした．改革のポイントは，子どもの目線を大切にするということ，“遊び”の重視でした．設定保育を大幅に減らし，遊びを通しての総合保育の時間を増やしました．行事も削れるものは削り，残したものもやり方を随分変えました．最初は戸惑いを見せた保護者もいましたが，生き生きとした我が子の育ちを見て理解も深まり，やがて積極的な協力を得られるようになりました．4年後，園長2期目に入った頃に

は，すっかり改革は定着し，結果として長年の定員割れも完全に解消しました．少し時間はかかりますが，やはり改革は中身が大切だと思います．

その中身であるこの幼稚園の教育の適時性と原体験重視からのユニークなカリキュラムの改革自体についての考察は，第二報に譲るが，保育園と幼稚園，地方都市と大都市と言った違いはあっても，この両者の改革ポイントに，子どもの遊びの見直しとその重視が共通していると言うことは，大いに注目に値することである．だが，それにもまして重要と思ったことは，元園長の言った次の言葉である．

少子化時代の子育てだろうとそうでなかろうと，子育てとは究極のところ，それは“人間とは何か”“人間の幸福とは何か”に通底する哲学の問題ではないかと考えております．

という課題である．

注

1）和光保育園．杉山由美子著『ひとりっ子時代の子育て』（生活人新書）日本放送出版協会，2005
2）筑紫女学園短期大学附属幼稚園元園長からの聞き取り．
3）統計数字は，内閣府『少子化社会白書』（平成16年版），2004，ｐ６，ｐ179
4）総務省「住民基本台帳に基づく人口・人口動態及び世帯数」（平成17年３月31日現在），総務省ホームページ
5）日本13.9（％，以下同），イタリア14.1，ドイツ14.9，ロシア15.7，カナダ18.0，イギリス18.5，フランス18.5，韓国20.0，アメリカ21.5，中国23.0，インド32.8，注３）ｐ８参照
6）多産多死でありながら，人口急増を示した．明治・大正期の出生率は，統計はなくとも相当に高いものであったと推定される．
7）「毎日新聞」（2005年７月27日朝刊）
8）柏木恵子著『子どもという価値』中公新書，2001，ｐii～vii
9）林道義著『母性の復権』中公新書，1999，ｐ１
10）注９）ｐ188
11）林道義著『家族の復権』中公新書，2002，ｐ40～41
12）人類自身が自然の一部であり，生物としての母子関係の本能否定は，明らかに自然の破壊であり，性と生殖の分離，その人為的コントロール等も同様に自然破壊と言ってよい．
13）「朝日新聞」（1981年８月24日朝刊）
14）ライフ・ネイチャーライブラリー『霊長類』タイムライフブックス，1975，ｐ90～92
15）戸川幸夫著『ヒトはなぜ子育てが下手か』講談社，1986，ｐ175～183
16）杉山由美子『ひとりっ子時代の子育て』（生活人新書）日本放送出版協会，2005，ｐ166～194．なお，親の育児力を高める子育て支援については，松川由紀子著『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館，2004に多くの事例が紹介されている．